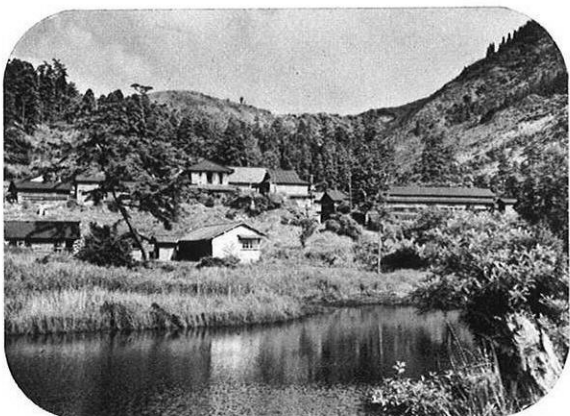




豪壮な人吉の太鼓踊は無形文化の圧巻

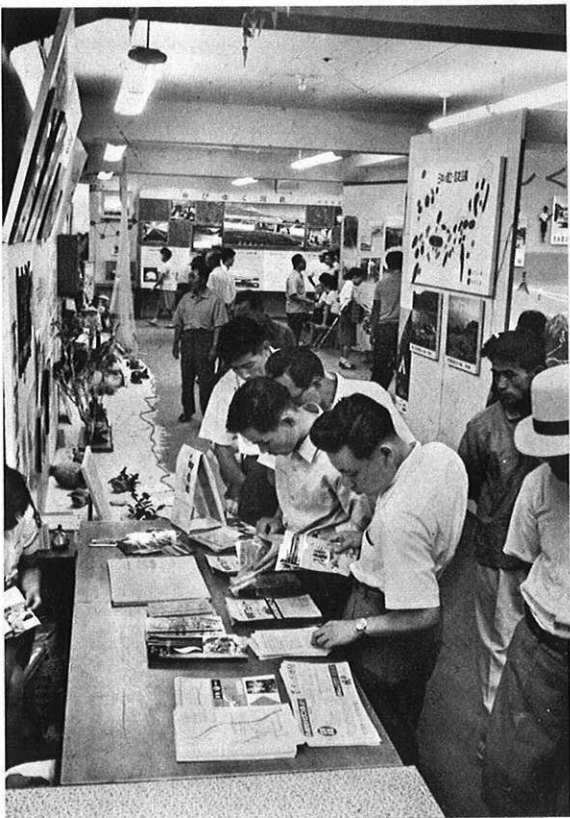
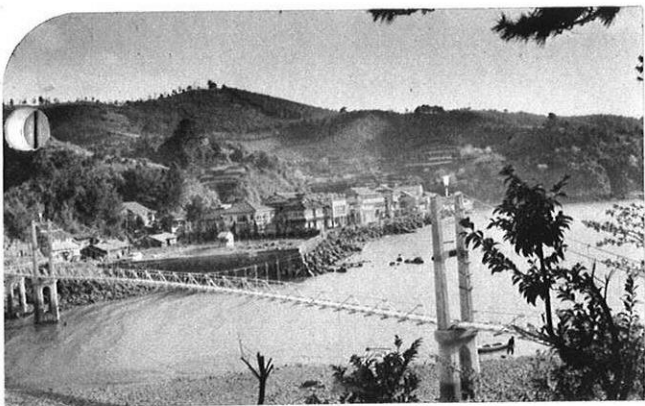


菊池水源は夏のものならず、紅葉の溪谷美はまた格別



素朴で人情味あふれる山間の温泉郷（地獄・垂玉）

海洋美もそえる海浜の温泉（湯見）



観光展で身近かな周辺の観光資源に注目を



観光ムードづくり

観光をたかめるにはまずPR。対外的にも、対内的にも。みんなが観光資源をよく識ることは、活用と保護の気持を高めるものだ。県では観光展や座談会の開催、ポスター等の印刷物の配布などでPRに努めているがまずはムードづくりこそが大切というところ。

<第一線の人々>

点と線のプランナー

—— 県観光課施設係員の場合 ——

オリンピックを契機として、ただでさえ高まりつつある観光ムードは、いよいよ盛り上っている感がある。わけでも、天恵の観光資源——海と山の二つの国立公園、六つの県立公園、豊富な温泉群などを有する熊本県の場合、全県的な拡がりで見ると、当然のことであろう。

「みんなの力で観光くまもとをつくらう」と、「観光客をあたたくむかえましよう」とのスローガンが掲げられたように、観光基盤整備」と「観光ムードづくり」を、何よりも必要とすることがあら

ためて確認されたのである。

立案から維持管理まで

さて、その「基盤整備」であるが、熊本県の観光を方向づけるマスタープランを立て、既存の施設を充実し、あるいは新たな開発をやりながら、いわゆる受入れ態勢を整えて行こうとする役割、それが県観光課施設係の仕事である。

この係のSさんのデスクの上に、「地獄・垂玉集団施設地区整備計画」あるいは「瀬の本集団施設地区整備計画」などといったおびただしい写真真がのっている。

二つの国立公園といういわば観光の宝庫を擁した熊本県であるが、そこに観光施設を整備しようとするには、まず、第一段階として公園計画の基本を立案することから始められる。この総合プランは、国や、公園審議会の手によって慎重に検討される。そして、いよいよ具体的な形で実施されるわけであるが、この計画を立てる段階から、施設が起きるまで、いや、完成後の維持管理まで手がけるのがSさんたちである。

地獄・垂玉地区の場合を見てみると、温泉と国民宿舎をとりまいて、駐車場、キャンプ場、その中心となるセンターロジック、展望所などなど、計画に従って、ほとんどが完成の段階にはいり、いわゆる「点」としての整備は、着実に進行しているのがよくわかる。

ただ、この「点」を有機的に結びつける「線」が、まだまだであることは、Sさんの悩みの種。例えば、地獄の駐車場も途中の道路が整備されれば、もっと生きてくる。また、完成を急ぐ湯の谷の県営有料道路に直結する下田・赤水線の整備は、南阿蘇にすばらしいルートを開くのだ。

阿蘇山への入口、坊中の有料道路の始末をどうするあたり、目立たない小さな建物が建っている。標札の阿蘇国立公園管理事務所の上、厚生省、熊本県、と並べて書いてある。ここに常駐する厚生省の管理人が一名、その管理人と一緒に、総面積七万畝という阿蘇国立公園を巡回したり、新設しようとする施設の打合わせをしたりするのも、県の仕事のひとつというわけ。Sさんの仕事は、自然公園のお目付け役ともいえるもうひとつの面があるのだ。

公園の自然美を見まもる

国立公園、県立公園あるいは一般の観光地について、自然の美しさを保つためには、管理、監督、指導が必要なのである。これらは自然園法の規制に基づくもので、国立・県立公園に施設を作ろうとする場合、国や県の許可を受けなければならぬ。この外、都市公園法や、屋外広告物条例などの規制にしても、ねらいはともに、自然の景観をここの質の低い観光地にならな

とを防ごうとするもので、遠い祖先の遺産ともいえるべき自然の美しさを、お互に傷つけないというわけだ。しかし、なかには、心ない業者や、観光客もあり、Sさんは、デスクの仕事と、現地の仕事との間をトンボ返りで走り廻っているのだ。

華やかな観光ブームの影で

今日も、貸切りの観光バスが列をなして走ってゆく。バスの窓からここに見える、セピア色のしやれた標識、駐車場や水飲み場、便所。阿蘇火山口附近の退避場。どれもこれも、できるだけ自然の美しさにマッチするよう、少しでも利用者役に立つよう、苦心して設計、工事したものでありである。しかし、観光地の施設をコツコツこさえている者にとって、観光客の華やかな嬌声は、縁の遠いものであるかも知れない。

かつては、毎日曜日を返上して砂利を入れた阿蘇登山道路。今は、完全舗装の有料道路となり、そんな話も昔語りになってしまった。ともあれ、少しずつだが充実してゆく施設、増加の途をたどる観光客数。Sさんはそれが嬉しくてたまらない風だった。

「阿蘇だけで、年四十回ぐらいくるでしょう。それでも、来るたびに、阿蘇は良いなあ、本当に思うんですよ。」

(W)